

---

# 冷凍希望者

勝 火令

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冷凍希望者

### 【Zコード】

Z0719Z

### 【作者名】

勝 火令

### 【あらすじ】

人間を生きたまま冷凍保存する、コーレルドスリープの研究をしている博士のもとにある日、自分を冷凍して欲しいという少女が現れる。

突然の申し出に博士は断るが、のつべきらない事情のある少女はどうしてもと黙りて退かない。

余りの剣幕に押された博士は、仕方なく事情を聞いてみると…。

ある寒い冬の日のことだった。コーヒーの香り漂う静かな研究室。窓からしんしんと降りつもる雪を眺め、静謐な景色に浸っていた俺を邪魔するよ、けたたましい呼出ベルの音が響いた。来客らしい。

元々出無精なうえ、こう寒い日は暖房の効いた部屋から出ること自体が億劫だ。まったく面倒臭いとぼやきながらドアを開けると、そこには小さくかしこまつた小学生くらいの少女がいた。

「すみませ……くちゅん！ ズズズ……ズビバゼン！ ここにおられる、ゴールドスリープの研究をしていらっしゃる方にお会いしたいのですが」

少女は鼻水をかみすぎて目と鼻が真っ赤になつた顔をむけ、まっすぐこちらを見て言った。そのあまりに真剣な様子に少しだじろいでしまう。

「それは俺だが……」

「なんと、あなたが！」

少女は目を輝かせた。そしてがつしと俺の手を握ると、胸のあたりまで引き寄せた。

「博士、わたしを、冷凍してください……」

「はあ？ 何を言つているんだ」

「よろしく、よろしくお願ひします……」

ずいずいと接近してくる。少女の固い胸が薄い布越しに押しあてられる。ん？ 薄い布？

「いや、ちょっと待て。」

俺はふと気付いた。少女はキャミソールにホットパンツという、真冬では考えられない薄着だった。

「おまえ、寒くないのか？」

「はー！ 全然！ こう見えても寒さには強いんです！ クチュン！」

「いや、とてもかわいらしくしゃみが聞こえるんだが」「これはそうじゃないんでチュー」

「雀かおまえは…」こんな寒い日にそんな薄着で何考てるんだ。話はいいからまず中には入れ！」

「いえ、ここで、ここでいいですから！」

「そんなわけにいくか。さつさと入れ、風邪ひくぞ」

俺は抵抗する少女を無理やり室内に迎え入れた。

「くちゅん！くちゅん！……はあはあ」

俺は少女を研究室の応接用ソファーに座らせた。少女は心なしかさつきまでと比べて辛そうに見える。

「あたたかい「コーヒー」だ。飲みなさい」

「いえ、遠慮します……はつくちゅーん！」

「しかしこのままでは風邪を……」

「いえ、本当に結構なんです。それに、クションーーのくしゃみは、風邪が原因ではないんです」

「はあ？風邪が原因じゃない？花粉症かなんかか？いや、この真冬に花粉症もないだろ？」「……」

「花粉症、おいしいです。わたしはあるもののアレルギーなんです」

「ああ、アレルギーか」

それならくしゃみをする理由もわかる。そういうのこの部屋はさつきまで俺が飲んでいたのも含め、かなり「コーヒー」の香りが漂っている。といふことは、

「コーヒーにアレルギーがあるのか？」

「いえ、そういうわけでもないんです。くちゅん」

違うらしい。

「わたしはこのアレルギーのために、博士に「ゴールドスリープ」して欲しいと思つてきたのです」

「どういづわけだ？アレルギーと「ゴールドスリープ」の間に何の関係がある」

「わたしのアレルギーはこれまでずっと薬でなんとかしてきたので

すが、それが効かなくなつて、症状が抑えられなくなつたのです」「しかしそれなら病院でもつと治療を受けたらいんじゃないのか？」

「駄目なんです。どんな薬も効かなくて……。くちゅん！失礼。しかもわたしのアレルギーはどんどん重症化していく、このままではいずれ死んでしまうだろつとお医者さんが話しているのを聞いてしまつたんです」

「ははあ、それで治療法が見つかる未来までコールドスリープしたいと言つたわけか。たしかにアレルギーの原因療法は確立していない」「いえ、それだけではないんです」

「なに？ どういうことだ。そういうえば、何のアレルギーなのか聞いていなかつたが……」

「問題はまさにそれなんです。実は、わたしのアレルギーというのは熱なのです。つまり、熱によってアレルギーが引き起つたそれでしまつといつ、世にも珍しい熱アレルギー患者なのです」

「はあ？ そんなことがりえるのか」

「信じられないかもしだれませんが本当です。ですから冬だとこうのにこのようにこんな薄着でやつてきたのです」

「そんな馬鹿げたアレルギーがあるか。ふざけるのも大概にしてもらおつ」

「信じてくださいーなんなら試してみてくれてもいいんです！ お願ひです！ 試してみてくださいー！」

必死ですがりつぐ少女の様子に俺は少し試してみる氣になつた。

「じゃあ、さつきのコーヒーを飲んでみる」

「うう、わかりました……」

少女は2、3回フーフーと冷ますと、ゆっくりと口をつけた。その瞬間。

「くちゅんーくちゅんーくちゅんー！」

けたたましくしゃみを繰り返す少女。その皮膚に蕁麻疹がプツプツと浮き出る。

「くちゅん……はあは、これでいいですか？」

「うーむ」

確かにアレルギーの症状が出ていることには間違いない。だがまだ熱のアレルギーと決まったわけではない。俺はいつもポケットの中密かに忍ばせているカイロを不意に少女の脚に当たた。

「ひいいー！」

見るとカイロが触れている部分から蕁麻疹が広がっていく。俺は慌ててカイロをどけた。

「くちゅん！くちゅん！ひどいです、うひひ……。くちゅん！」

少女はうらみがましく涙目で俺を睨みつける。

「悪かった、信じよつ」

どうやら熱アレルギーといつのは本当のようだ。

「うー、分かっていただけて嬉しいです。くちゅん！お医者さんと言わせると、わたしの症状はどんどん重くなつてあり、薬も効かない今、このままでは死ぬしかないということです。くちゅん！先生、どうかわたしを助けてください！」

「そのような事情ならば当然だ。で、早くコールドスリープ装置の中に入りなさい」

「ああ！ありがとうございます」

「ただしコールドスリープは研究途中だ。成功するかどうかは五分五分だぞ」

「ええ、それで結構です。このままではじつせ死ぬのですから生きていられる可能性が50パーセントもあるだけで贅沢言えません」

「わかった。ではもう聞くまい。で、そこのかプセルに入りなさい」

「はい。このご恩は一生忘れません。きっと恩返しします」

そう言って少女がカプセル内のシートに腰掛けると、透明な蓋が自動的にしまった。

「そのとき俺が君のじちらかが死んでいなければいいがな。……よし、装置に入つたな。いくぞ」

「お願いします」

俺は端末を操作して冷凍開始のスイッチを押した。

装置が作動し、窓から少女が徐々に凍つっていくのが見える。やがて端正な青白い顔に霜が降りて、ピクリとも動かなくなつた。するとノズルから装置の内部に水蒸気が吹き出し、しばらくすると少女は分厚い氷の柱の中に閉じ込められた。

全て終わつたとき、モニターにCOMPLETEDの文字が表示され、俺はコールドスリープが成功したことを知つた。

装置からかちんこちんに凍つた少女を取り出す。人一人救うことができたということ、ずっと研究していたコールドスリープが成功したということに俺は達成感を覚え、しばし満足げに笑つた。

しかしほやほやしているとせっかく冷凍した少女が溶けてしまつ。俺は、被検体を保存する冷凍シェルターまで少女を運ぶことにした。その途中、俺は熱アレルギーという奇妙な病気に思いを巡らせていた。

熱などといふものによつてアレルギー、つまり生体内の免疫の過剰反応が引き起こされるなんて、常識的にみて考えられない。おそらく生体内の免疫システムが、熱、つまり元素の振動という刺激に反応したのだろうが、そんなことはたしてありえるだろうか。しかし、これも何かの縁だ。

いつかきっとおまえの病気も解明してみせよう。

そしてなにげなく少女の身体を包む氷柱に手を置いたとき、俺は戦慄した。

少女は病気がどんどん進行していると言つていた。

そして元素の振動でアレルギーが引き起こされるなら、原理的には絶対零度、マイナス273・15にしない限りアレルギーは起こるはずである。

しかしコールドスリープはマイナス数十度付近で凍らせているだけなのだから……。

俺がはつと少女の顔を覗き込んだ瞬間、まるで遙か遠くから聞こえ

てぐるようなぐもつたちこな音で、  
「ぐわん」  
とこう声がしたかと思つと、田の前の氷柱が粉々に砕け散つた……。

(後書き)

ただの思いつきで、科学考証とかないです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0719n/>

---

冷凍希望者

2010年10月10日23時10分発行